

カタストロフからの哲学

ジャン・リュック・デュビュイをめぐって

「カタストロフ」という言葉は、意訳される発想だが、超越予測不能で不可避的な災厄を指す語が世界中で流通するようになったのは、デュビュイや9・11から3・11とブクシマや最近の無差別テロまで、突発的で破壊的な事故や事件が日常化した現実を反映しているからだろうが、本書を一読して思い出したのはもう十数年前の二〇〇三年冬、パリ郊外のメトロの車内でまったく未知の女性から突然「あなたを『聖なるもの』の刻印をすか?」と真顔で尋ねられたという、ごく私的な出来事だった。あまりにも唐突なので驚いたが、一瞬間を置いて「世界の終わりのことかな」と問い返せば、それはヴィリリオの企画による大事故や大災害の記録とそれらをもモチーフにした現代アート(「美術展」)「Ce qui arrive」を見た直後だったせいかもしれない。そんなカタストロフの時代を予告するかのようには、ボードリヤールが「世界は錯乱的な状況に陥っているのだから、われわれも錯乱的なものの見かたにむかわなくてはならない」(『透きとおった悪』)と書いたのは、もう四半世紀も前のことだ。

「認識論」ではなく、「認識論」をめぐって、同時にそれを封印する徴がなんであるかを、リスク論を超えて「存在論」的「不確実性に踏みこむ力」をカタストロフ論がすでに提案されていた経緯を(「破局」と訳されること多い)「カタストロフ」の多義性を確認しつつ、要約する。その上で、(起源から終末へとむかうリアリティ)「歴史の時間」にこだわる「運命論」的カタストロフ論ではない。むしろ、(時間軸上の未来とい

もの刻印)を中心に読み直し、彼の破局論が合理主義的経済至上主義を前提とする「予防原則の理論」を批判の対象としていたことが、この「徴」を指摘して、ドレフュスが、このような未来観は西谷が序章で述べた「大地は七代先の子孫からの預かりもの」というアメリカ先住民の伝承に通じるものであり、ポストモダンと「歴史の終わり」論議に改めて終止符を打ち、西欧型「近代性」の限界を告知する思想的試みでもあるだろう。

★となく、よつてつ氏は慶應義塾大学専任講師・フランス哲学・社会思想専攻。パリ第七大学博士課程終了。共著に「顔とその彼方」「全体性と無限」の「プリズム」など。一九八〇年生。

終末論的ニヒリズムを越えて

現実を冷静に受け止めようとする
意思を明確に表明した著作

塚原史



四六判・198頁・2200円
以文社
978-4-7531-0327-0
TEL. 03-6272-6536

「カタストロフ」という言葉は、意訳される発想だが、超越予測不能で不可避的な災厄を指す語が世界中で流通するようになったのは、デュビュイや9・11から3・11とブクシマや最近の無差別テロまで、突発的で破壊的な事故や事件が日常化した現実を反映しているからだろうが、本書を一読して思い出したのはもう十数年前の二〇〇三年冬、パリ郊外のメトロの車内でまったく未知の女性から突然「あなたを『聖なるもの』の刻印をすか?」と真顔で尋ねられたという、ごく私的な出来事だった。あまりにも唐突なので驚いたが、一瞬間を置いて「世界の終わりのことかな」と問い返せば、それはヴィリリオの企画による大事故や大災害の記録とそれらをもモチーフにした現代アート(「美術展」)「Ce qui arrive」を見た直後だったせいかもしれない。そんなカタストロフの時代を予告するかのようには、ボードリヤールが「世界は錯乱的な状況に陥っているのだから、われわれも錯乱的なものの見かたにむかわなくてはならない」(『透きとおった悪』)と書いたのは、もう四半世紀も前のことだ。

「認識論」ではなく、「認識論」をめぐって、同時にそれを封印する徴がなんであるかを、リスク論を超えて「存在論」的「不確実性に踏みこむ力」をカタストロフ論がすでに提案されていた経緯を(「破局」と訳されること多い)「カタストロフ」の多義性を確認しつつ、要約する。その上で、(起源から終末へとむかうリアリティ)「歴史の時間」にこだわる「運命論」的カタストロフ論ではない。むしろ、(時間軸上の未来とい

もの刻印)を中心に読み直し、彼の破局論が合理主義的経済至上主義を前提とする「予防原則の理論」を批判の対象としていたことが、この「徴」を指摘して、ドレフュスが、このような未来観は西谷が序章で述べた「大地は七代先の子孫からの預かりもの」というアメリカ先住民の伝承に通じるものであり、ポストモダンと「歴史の終わり」論議に改めて終止符を打ち、西欧型「近代性」の限界を告知する思想的試みでもあるだろう。

★となく、よつてつ氏は慶應義塾大学専任講師・フランス哲学・社会思想専攻。パリ第七大学博士課程終了。共著に「顔とその彼方」「全体性と無限」の「プリズム」など。一九八〇年生。